



朝日新聞東京本社
東京都中央区築地5丁目3番2号
〒104-8011 電話03-3545-0131
©朝日新聞東京本社 2000

飲料容器、「リターナブル瓶」にすると…

いろいろな飲み物の容器すべてをビール瓶や一升瓶のように何回も利用できる「リターナブル瓶」にかえると、二酸化炭素(CO₂)の年間排出量が約七十八万ト減り、廃棄物として埋め立てられる量が九割、処理費用は千五百億円節約できる。こんな試算を東大生産技術研究所の安井至教授らで作る研究者グループがまとめた。ワインやウイスキーなど使い捨ての「ワンウェイ瓶」の増加で、リターナブル瓶は減る傾向にあるが、同グループは「七十八万トは政府が検討しているサマータイムの削減効果(四十万トより大きい)」などとして、リターナブル瓶を普及させる制度づくりを提案している。

東大教授らが試算

CO₂ 78万ト 処理費150億円 減

安井教授らは、スチール缶、アルミ缶、ワンウェイ瓶、ペットボトルなど五百リットルの容器を一回使うのに、原料の調達から製造、廃棄までにどれだけ環境へ負荷をかけているかを調べ、それに生産量を掛け合わせて比較した。

それによると、飲料容器の生産から廃棄までの過程で排出されるCO₂の総量は、現状で年間百三十五万八千ト。これらの容器をすべてリターナブル瓶にする、と五十八万三千トになり、七十七万六千ト減る。すべてをペットボトルにした場合は、百四十九万三千トに増えるという。一九九七年の日本のCO₂総排出量は約三億三千六百万トなので、リターナブル瓶による削減効果は、〇・二三%になる計算だ。

一方、廃棄物として埋め

「夏時間」より効果大

立てられた飲料容器は九八年は約百四十万トだった。すべてリターナブル瓶にすると、十分の一の十五万トになる。一般廃棄物の処理費に換算すると、千五百億円が節約できる。

また、窒素酸化物や二酸化硫黄の排出量で比べても、リターナブル瓶にかえると、約四割削減できるとがわかった。

回収率向上へ方策を

容器製造にかかる費用を比べると、リターナブル瓶は二十九円、ワンウェイ瓶は二十五円だが、自治体が負担しているリサイクル費用をワンウェイ瓶に上乗せすると五十九円になり、リターナブル瓶の方がはるかに安い。税金を投入したりリサイクル政策が、逆に使い捨て容器を増やしている現状もろかがえた。

日本の飲料容器は元々、リターナブル瓶が多かった。

研究グループの一人、生活クラブ連合会の山本義美さんの話。いまの容器包装リサイクル法では、自治体の負担が重く、ワンウェイ容器が減らない仕組みになっている。事業者の負担を重くするとともに、リターナブル瓶を普及させるために法的な支援の仕組みが必要だ。ドイツでは、法律で飲料容器に回収率の基準を定め、それを下回れば強制的にデポジットを課すとしている。日本もこうした制度を見習うべきだ。